

# アルジェリア人質拘束事件で亡くなられた伊藤文博さんの追悼

2013年1月16日、日揮(株)に勤務されていた伊藤文博さん(1974年一関工業高等専門学校卒)はアルジェリアのイナメナスの天然ガス関連施設で、アルカイダ系武装勢力の銃弾に倒れた。日本中が見守る中、無言の帰国となった伊藤文博さんのご逝去を悼み、事績を紹介し、その人柄を偲ぶ。



伊藤文博さん  
(2010年3月撮影)

一関工業高等専門学校  
物質化学工学科 梁川 甲午

## はじめに ～事件と私～

私は一関高専化学工学科の一期生で、伊藤さんの級友であり、卒業以来、母校に教員として勤務し、同窓会理事をしている。伊藤さんには、ここ10年来、改組して物質化学工学科となった学科の5年生に特別講義をお願いしていた。私はその担当であり、2012年11月26日も一緒に昼食を食べ、講義をしていただき、「来年も頼むね」「了解」という会話で見送ったのだ。

年が明けて、1月16日夜のニュースで、アルジェリアのイナメナスで日揮(株)の天然ガス処理施設がアルカイダ系武装勢力に襲われ、日本人を含む方々が人質として拘束されたことを知った。胸騒ぎがした。そこで、翌朝、伊藤さんのアドレスに「無事ですか。アルジェリアの事件で」の題でメールを送った。ニュースは状況の悪化を伝えるが、返事がない。そこで、21日、「一関高専より、貴兄の安否確認」と目立たせて、「俺は無事だけでも良いから返事を」と書いて再送した。

彼は定年を過ぎた58歳の特別理事であり、よもやとは思ったが、長くアルジェリアが仕事場だったので心配したのである。しかし、返事は来ず、代わりに来たのが、22日朝のNHK盛岡放送局からの取材打診であり、15時には「残念ですが、伊藤さんは亡くなられたようです。今晚のニュースで報道されます」という知らせに変わったのだ。

呆然自失の中、「一関高専同窓会の40周年記念講演をやってくれた、あの伊藤さんがアルジェリアで亡くなられたことをOB等多くの人々に知らせたい」と思った。その後は、取材が殺到し、テレビや新聞で報道されることになった。

数日の内に、級友4人が拙宅に集まり、八方手を尽くして連絡をとってくれた。思い出を一言ずつ述べ合った。40年以上の時を越えて、15～20歳の多感な時期の思い出に一瞬で辿り着いた。私は、一緒に歌いながら歩いた「夜間50キロ徒歩旅行」を思い出した。改めて、思い出多い宝物のような時代だったと思った。誰も彼もが、良い奴だったと言い、大活躍していたのに、銃でやられたのか、と残念がった。

私がテレビに映ったせいで、OBからも連絡が来た。一人は「見ず知らだが、素晴らしい先輩がいたことを知った」という理由だけで弔意を届けてきた。ハンドボール部の後輩という方は、「部を創った先輩だと聞

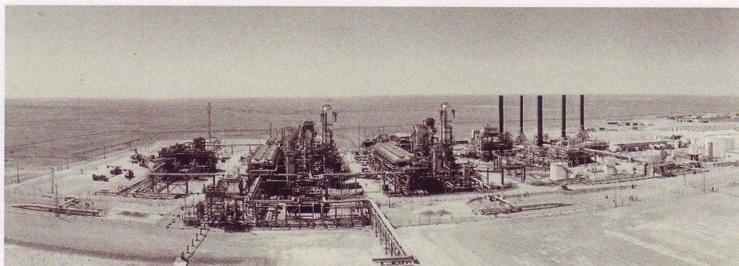


写真1 伊藤文博さんがプロジェクトマネージャーとして取り組んだ日揮(株)インサラーの天然ガス処理施設

いたので献花したい」と、申し出てくれた。

私は、物質化学工学科、一関高専同窓会、化学工学科一期・二期生を代表して弔電を打ち、また、これらを代表して葬儀に出席し弔辞を述べた。同級生の有難さ、人の心の温かさと思いの果てしなさをしみじみと感じて、そうせざるを得なかった。

その後も、9月6日に一関で開催された「ヒューマンネットワーク高専」の総会で、追悼の短いお話をさせて頂いた。学生にも教えておきたいと考えて、夏休み明けの全校集会で紹介した。同期でプロデュースしたNSP\*<sup>1</sup>（エヌエスピー）のことも含めてである。同窓会報「木魂」にも級友二人と追悼文を載せて偲んだ。暮れの12月16日「化学工学一関セミナー」でも「一関高専OB伊藤文博さんの思い出と化学工学」という題で話をさせて頂いた。彼の思い出は高を増した。

## 伊藤文博さんの事績

### ～一関高専から見えること～

彼は、1953年宮城県本吉郡志津川町（現三陸町）生まれ。1974年一関工業高等専門学校（化学工学科）を卒業し、1978年東京工業大学修士課程（化学工学専攻）を修了して、日揮株に入社した。略歴は、2010年3月の一関高専同窓会創立40周年の記念講演資料に、「はじめの3年間は、アルジェリアとマレーシアの天然ガスプラントの建設現場に駐在し、以後、プロセスエンジニア、プロジェクトエンジニア、エンジニアリングマネージャー、プロジェクトマネージャーとして、主に資源開発関係のプロジェクトに従事」とある。当時は、日揮株理事、国際事業本部アルジェリア/開発プロジェクト部長であった。

彼の活躍は、2008年3月に国立高専機構が高専生の活躍を紹介するために発行した「われら高専パワー全開」に載った。タイトルは、「天然ガス及び石油処理設備の設計・建設－温暖化対策を施した天然ガス輸送プラント」。当時53歳。日揮株理事、資源開発プロジェクト部長である。その中で、彼はプロジェクトマネージャーを務めたIn Salahプロジェクトについて紹介した。仕事の内容は、天然ガスや原油中に含まれる不純物や随伴ガス等を分離し、圧力や温度を調整して消費地に輸送するエンジニアリングである。彼は、一関高専での寮生活についても、様々な国の技術者が協力して行う仕事に非常に役立っていると書いた。ま

\*<sup>1</sup>：一関高専卒の3人、天野滋、平賀和人、中村貴之のバンド。あせ、さようなら、夕暮れ時はさびしそう、など数々のヒットソングがある。

た、製造業に軸足を置いたままの日本は井の中の蛙であり、Bricks 諸国の台頭がある中、資源確保で後れを取っている現状に、もっと世界を見ろと警鐘を鳴らした。さらに、随伴ガス中の二酸化炭素を分離し、元の地中に戻すことで地球の温暖化を防ぐ最先端技術CCS（Carbon Capture and Storage）についても紹介した。

この内容は、前述の記念講演「サハラ砂漠のプロジェクトで学んだこと－エネルギー資源の確保と温暖化対策－」でも紹介された。日揮株は世界中でエネルギーや化学合成のプラントを建設しており、彼は入社以来30年の内、延べ12年が海外生活とのことである。

彼は典型的なケミカルエンジニアの道を行ってきたように見える。それは、一関高専化学工学科の設置目的にまさしく適うものである。そこで、2002年頃からは、「資源開発と化学工学」という特別講義をして頂いていた。その中で彼が掲げたテーマは、エネルギー資源の利用においてエンジニアが働くことの位置づけ、基礎的なサイエンスと工学の大切さ、そして化学工学はエネルギーと環境を扱う工学であるという点である。

資源開発プロジェクトは、貯留層から、その圧力を有効利用し、天然ガスの輸送のための露点調整や原油輸送のための蒸気圧調整を行って、消費地にエネルギーを届けるビジネス。彼は、In Salah プロジェクトを例として写真や図をたくさん使って説明してくれた。期間は、全体で1997～2004年の8年。その内、概念設計が2年、基本設計と見積もり及びプロジェクトの採算の確認に2年、それから詳細設計、調達、そして建設と試運転が2001年～2004年の4年。これらの仕事を一括請負するのが、日揮株の仕事である。

時間も規模も兎に角大きい。アルジェリアのIn Salah 地域は本州の半分はあろう。そのあちこちに井戸を掘り天然ガスを集め、精製して、パイプラインを敷設してアルジェリア北部のHassi R' Melに輸送し、さらにジブラルタル海峡とチュニジア経由の2経路でヨーロッパに輸送する計画である。生産計画も25年の長期にわたる。彼はイギリスに駐在し、石油メジャーBPと交渉しながら、そんな巨大な仕事のプロジェクトマネージャーを務めた。

図1に、化学プロセスと化学工学、図2にプロジェクトエンジニアの仕事を示して少し紹介する。化学プロセスは、化学物質を造るための原料と適切な操作の種類と順序である。化学プラントは、それを経済的に安全に実現する一組の装置群。そして化学工学は、その設計や操作に関する学問である。化学プラントは、

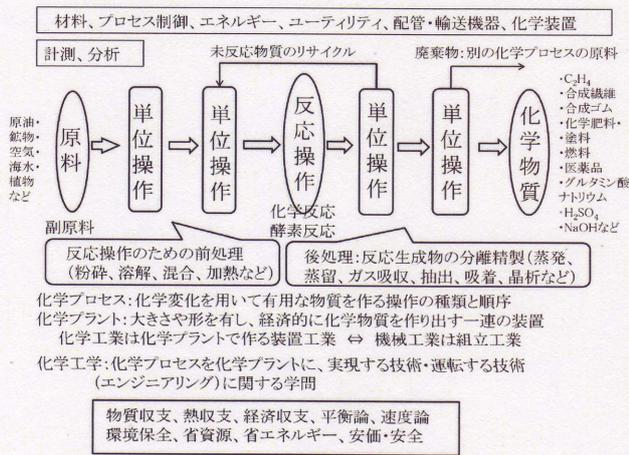


図1 化学プロセスと化学工学

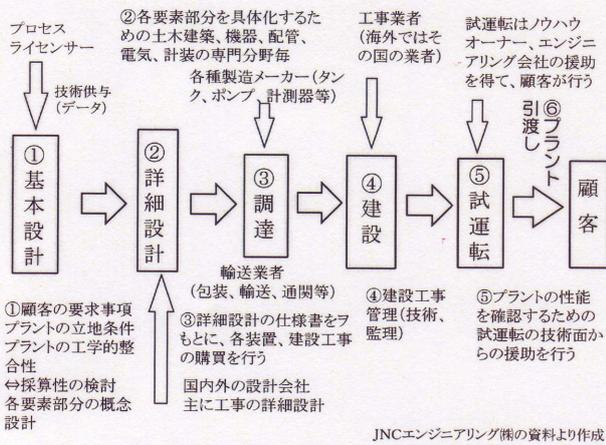


図2 プロジェクトエンジニアの仕事

簡単に言えば、容器と配管と輸送手段と制御機器からなる。この容器は、目的に応じて反応塔であったり、溶解槽、蒸留塔や熱交換器であったりする。もちろん、この容器内で所望の変化を効率的に行うための装置上の工夫が重要で、温度や圧力などの条件を維持・監視する必要がある。その大きさは、そこに入る物質質量とそこで起こる反応や物質移動、伝熱の速度によって決まる。

プロジェクトエンジニアの仕事は、それを実現するための全体であり、設計、調達、建設の3ステップを含んでいる。砂漠に道路や飛行場を造る土木工事から始まり、井戸を掘り、長大なパイプラインを敷設し、最初の写真の中心処理施設を造る。彼の仕事は正に資源開発と化学工学のコラボレーションだ。

私は彼の仕事を、家を建てる大工の棟梁の仕事に似ていると思って、少しわかった気がした。つまり、予算内で客のニーズを満たす機能と大きさを満たすプラ

ンを作成し、工事全体を請負う仕事だ。多様な資材を適宜調達しながら、土木、基礎、建築、屋根葺き、外壁、内部造作、下水道、電気、塗装などの工事などを調整しながら重層的に積み重ねて完成させる。書いてみて、改めて大変な仕事であることに気づく。

彼の仕事は、家とは、規模も複雑さも、期間も工事費も関係者の数も、まったく異なる。敢えて建築物に例えるならば、城とでも言えようか。彼の務めたプロジェクトマネージャーの職責は本当に重い。

彼の特別講義を聞いた学生の感想を紹介する。O君は、「単なる反応について考えるのではなく、その反応を工業的に達成するために、さまざまな知識を総動員する必要があることから、化学の集大成なのではないか。化学工学に浪漫みたいなものを感じた」とまとめた。Mさんは、「実際にプラントの立ち上げを行っている人の話を写真や分かりやすい資料も交えて聞くことができ良かった」と書いた。化学工学とは何か、何の役に立つのかについて、魅力的にしっかり応える、余人をもって代えがたい講義だった。

2006年3月には、学科が運営を担った化学工学会学生発表会一関大会でも、「基本設計は面白い」という題で、特別講演を行って頂いた。本当に、人柄に甘えて、重ね重ねお世話になったのである。

## その人柄を偲ぶ

恩師千葉陽一先生は、彼が高専の4年の5月に書いた学級日誌のコピーを送ってくれた。彼は野鳥の会の会員であり、仙台の蒲生海岸に探鳥会で干潟のシギ・チドリを観察に行った時のことを書いている。「彼らはシベリアとオーストラリアの数千キロの渡りをする。その途中で採餌・休息のために立ち寄るのである。彼らはカニや貝等を主食とするので、干潟が必要なのである。ところが干潟は工場立地に最適である・・・」。そして、渡り鳥にとって干潟の埋め立ては絶滅を意味し、埋め立ては環境と調和しないと述べ、工学の関わり方に疑問を述べている。級友は、彼がプラント建設に携わる夢も語っていたと教えてくれた。野鳥観察に端を発し、化学工学科に学んだことが、さらに東工大へ編入学する動機になったのだろう。

東工大の蔵前工業会誌に掲載された小川浩平元副学長の追悼文には、心が震えた。少し紹介させていただく。当時はまだ高専からの編入は緒に着いたばかりで、教官の多くは編入生の学力・研究力に懐疑的であった。その不安を一掃させたのは君だった。応用化学実験に

おける巧みな実験操作、そして内容の高い実験レポートを目にして、「伊藤君はいいな。他の学生よりも良い」と上々の評価をした。卒業研究では、伊藤教授をして、『彼はエンジニアとしてのセンスもあるし、良いね』と言わしめた』とある。小川先生は、さらに「円転滑脱趣味も豊かで、かつ気さくで飾らない君の人柄は、接するすべて人たちに親しみと信頼感を与えた」と人柄に付言しておられる。

千葉先生も「飾らず、臆せず、前向き」と人柄を評し、学生寮の舎監をしていると、「・・・なんだでば」と、よく話をしに来たことを思い出して、「死んだ気がしない、調和のとれた優秀な人物だった」と残念がった。奥さんは喪主挨拶の中で、仕事のモチベーションは何かを聞いたとき、「自分が最初から関わったプラントが動き出す場に立ち会った時の感動なんだ」と答えたことを紹介した。ストレスに耐え、仲間と共に、多くの問題・課題を解決して到達したゴールである。エベレスト登頂にも似た筆舌に尽くせない最高の気分であったらうと思う。

## 終わりに

日揮株の方が、砂漠のプラントに向かう車中でも、空を飛ぶ鳥を見つけては彼が説明したことを懐かしそうに紹介してくれた。野鳥は、彼にとってはエンジニアを目指す動機につながり、一方で、慰めでもあったのだらうと思うと、趣味の意味深さ、個性、人生の彩

というものを感じる。

昨年の初盆に、級友と志津川の大雄寺を訪ねた。その折、お母さんから、事件の五日前に「BPの副社長から来て欲しいとの希望があって、アルジェリアに行くことになった」と電話があったことを伺った。彼は良い仕事をしてきたから、呼ばれたのだらうと思った。しかし、そこで待っていたことは、正に「人間万事塞翁が馬」である。伊藤家の墓地の前には、東日本大震災で津波に化け、彼の実家も流失させた志津川の海が何事もなかったかのように静かに陽の光を反射していた。

この事件には、伊吹文明衆院議長が国会を代表して弔意を表し、葬儀にも、内閣総理大臣と外務省からの弔意文が寄せられた。日揮株というエンジニアリングコントラクターが果たしている役割の大きさと政府の事件への責任を知る思いである。

伊藤文博さんの特徴として、野鳥観察の趣味、資源開発、プロジェクトマネージャー、長い海外生活、人柄の良さをあげたい。典型的なケミカルエンジニアの道を歩み、国際的にも、また母校にも大きな足跡を残した彼の事績とお人柄を紹介させていただいた。読者諸兄の記憶にとどめ、仕事や人生に生かしていただければ幸いである。アルジェリアで無念にも散った彼の思いは、そこで生き、残ると思う。私も忘れまいと、木部一樹氏の野鳥の絵を買って玄関に掛けた。

伊藤さんは、2014年1月19日、故郷の大雄寺に埋葬された。合掌。

\*2: だいおうじ。南三陸町志津川にある(伊藤家の菩提寺で曹洞宗)。

\*3: 青森市出身の画家。野鳥や樹木を写真のようにリアルに描く。



## 一関工業高等専門学校の紹介

物質化学工学科では、PBL\*<sup>4</sup>科目「創成化学工学実験」を行っている。学生はまず、面白いと思う実験をネット等で検索し、工夫・検討する点も含めて構想を発表する。その後、興味のある者4人ずつにグループ編成し、実際に実験して構想を試す。失敗すれば原因を追究し、成功すれば内容に磨きをかける。そしてハイライトが、高専祭の2日間行う来場者へのプレゼンテーションである。これは得票を競うコンテスト。その結果は成績に影響するので、学生たちは頑張る。そして最後の小一時間は、全員集まって、来場者へのプレゼンの仕方を互いに披露し合う。

その他の仕組みは割愛するが、この科目の特徴は、学生が自らの意欲で活動し、それが相互啓発の機会と自信を生み出すことであり、我々に、学習だけでなく能力が見えることである。

このプレゼンは、来場者数の多さが背中を押している。写真は今年10周年を迎え、4000名の市民を集めた本校の自慢「ウォーターボーイズ」の4段橋である。

\*4: Project Based Learning/課題解決型学習



「ウォーターボーイズ」の4段橋